

港区立郷土歴史館

歴史館だより

「未来に伝えよう！みなと遺産 新指定文化財展」より

江戸時代にみる江戸時代の飯倉

石田 七奈子
(学芸員)

江戸には約1700もの町が存在していました。しかし、その数に対して町についての資料は多くはありません。例えば江戸の町を描いた沽券図は、70点程度しか現存していません。うち約50点は江戸中心部の日本橋・京橋のもので、港区域のものは数点のみです。そのうちの1枚が飯倉町沽券図（図1）です。



図1 飯倉町沽券図（図中の赤字は筆者が記入）

沽券図とは町人が住む町屋敷ごとに、屋敷地の形状や広さ、金額、持ち主などを記した図面です。17世紀以降、江戸では町屋敷の売買が活発化したことから、幕府は地価を把握するため、宝永7（1710）年と寛保3（1743）年の二度にわたり、町奉行より町名主に沽券図の提出を命じました。

命令の背景には、江戸の町の変容がありました。特に明暦3（1657）年の大火後の復興やそれに前後する都市改造を機に人口・面積が急激に増加します。あわせて商品流通も増進し、商売や住宅など需要に応じて町屋敷が売買されました。社会・経済の発展により拡大・高密化する江戸町人地に対し、幕府は現状を把握し、支配体制を再編・強化する必要に迫られたのです。沽券図はその基礎資料とされました。

飯倉町沽券図は寛保3年の命令を受けて、翌年3月に作成されました。縦248.8cm、横305.8cmと四畳半ほどの大きな絵図で、西を上にして飯倉一、二、三、六丁目、現在の麻布台一、二丁目辺りを描いています。黄色の部分は道を示し、西久保通りを中心に、道の両側には町屋敷が連なりました。明治時代以降の道路拡張などがありますが、西久保通りはおおむね現在の桜田通りに当たります（図2）。

沽券図には、一筆ごとに各町屋敷の地主・家守、間口・奥行・坪数、沽券高（地価）、小間高（間口1間あたりの沽券高）を記載しました。特に、客や商品が出入りする道に面した表の間口は商工業を営む町人にとって重要でした。そのため間口1間あたりの価格を示す小間高は売買検討の目安でした。

本図には84筆の町屋敷が書き上げられています。最も高額な小間高は80両で、西久保通りと六本木道（現在の外苑東通り）の交差点の北西角の町屋敷です。ここは他の角も73、58、42両と、40両未満が80%を占める84筆の中では高額です。一方、雁木坂と交差するT字路の角は46、20両、西側の道と六本木道が交差する角は24、22両と同じ角地でも小間高は低めです。また、通りごとの小間高の平均は、西久保通りが36両に対し、六本木道は27両、雁木坂は18両、西側の道は13両と差があります。

江戸時代、飯倉町を貫く西久保通りは、北は虎ノ門、南は赤羽橋、札ノ辻へ繋がっていました。武家屋敷が連なる西側から増上寺など寺社が密集する東側へ抜ける六本木道との交差点は、西久保四辻とも呼ばれた繁華地でした。西久保四辻の小間高80両は、日本橋万町の角地270両、東海道沿いの芝神明町の角地120両※などに比べると低いですが、飯倉町はそれらに次ぐ繁華な場所であったことがうかがえます。

本図は現在の新橋一丁目付近を描いた兼房町沽券図とともに令和5（2023）年度、港区の文化財に指定されました。どちらも令和6年1月13日から開催する新指定文化財展で展示します。ぜひ実物をご覧ください。

※岩淵令治「江戸の沽券図について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第204集（2017年、国立歴史民俗博物館）

参考文献

玉井哲雄『江戸町人地に関する研究』（1977年、近世民俗研究会）

岩淵令治「江戸の沽券図について」（前同）

『港区史』近世 上・下（2021年、港区）

図2 沽券図の範囲の現在
（二重線枠が沽券図の範囲、点線枠は明治時代以降の道路拡張）

港区立郷土歴史館

歴史館だより

三田小山町で発見された近代の痕跡

月岡 千栄

(学芸員)

南 北線麻布十番駅にほど近い三田一丁目では、再開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施されています。旧町名「三田小山町」として知られる当調査範囲は江戸時代には大名屋敷が広がり、近代は民間工場である三田製紙所や^{るつぽ}埴塙工場（現在の日本埴塙株式会社）が操業されていた地です。令和5（2023）年10月時点で調査予定面積約6,100㎡のうち2,300㎡ほどの調査が終了しています。現在までの調査では、江戸時代のみならず、近代の痕跡も多く発見されています。今回は、三田製紙所のあった土地から発見された謎の遺構（施設）についてご紹介します。



写真1 大型土坑（東から撮影）
写真上部の西側から木樋が接続している

明治8～15（1875～1882）年頃まで操業した三田製紙所は、日本で最も早く開業した洋紙製造会社の1社に数えられます。三田を含む芝地区は近代産業の礎となる官営工場（^{いしづえ}赤羽製作所、^{いくしゅじょう}三田育種場）が操業され、その後は民間工場も多くつくられました。三田地域で一早く洋紙製造業を営んでいた様子を知ること、初期近代産業の中心地であった三田周辺の歴史を考える上で非常に重要なことです。しかし、三田製紙所の操業期間は約8年間と短く、不明な部分が多くあります。そのため、発掘調査で三田製紙所の痕跡を調査できることは非常に興味深いことなのです。前段が長くなりましたが、発見された遺構についてご紹介しましょう。

発見された遺構は、約7.6m四方の方形に掘られた

木枠を伴う大型土坑です（写真1）。写真の通り、きれいに方形に掘り込まれた壁に木材の板が取り付けられています。底面には竹を敷いていた痕跡が確認されました。この大型土坑の西側（古川側）には幅30cmほどの木樋（木製の水道管）が接続している状況も確認されました。また、北側には排水用とみられる木樋も接続しています。このような遺構の状況から、詳しい用途は不明ですが、大量の水を使用する施設であったことは間違いなさそうです。遺構からは、近代の磁器やランプのホヤ※（ガラス製）と混じって、「赤羽製作寮」の刻印がある耐火煉瓦が出土しています（写真2）。赤羽製作寮は、調査地点から東に600mほど離れた場所にあった官営赤羽製作所の工場、伊豆梨本村で明治6～11年の間に耐火煉瓦を製造していました。出土遺物等から、この遺構は明治時代初頭頃に構築され、明治時代前半には土中に埋まったとみられます。このことから、三田製紙所が操業していた時期にこの遺構は存在していたようです。



写真2 「赤羽製作寮」の刻印がある耐火煉瓦

今回ご紹介した大型土坑は用途不明であり、そもそも三田製紙所の施設として構築されたものかも定かではありません。しかし、大量の水を使用する施設であったことから、製造過程で水を多く利用する製紙工場で利用されていたろうと想像はできます。今後行われる文献や類例の調査で、この遺構の用途も分かってくるかもしれません。三田小山町の近代の歴史が少しずつ明らかにされることを期待しましょう。

※ホヤ＝ランプのマントル（火の部分）を保護する覆い。